和's YAMATO（わずやまと）

2025
初春号

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」
蔦屋重三郎の卓越した手腕

■ 始まりは吉原の貸本屋
■ 活発な出版活動で経営基盤を強化
■ 江戸時代の出版事業
■ 吉原の変遷と繁栄
■ 社会の自由度が高かった「田沼時代」
■ 「べらぼう」全体相関図と主な登場人物

● 郷土史跡めぐり　高塚古墳（群馬県榛東村）
● 群馬の芸術家　平尾峰春・平尾泰子
● 市民生活を支える水道施設
前橋市歌島浄水場配水池
● 写真で楽しむ美しい自然
「初雪とサザンカ―群馬県立敷島公園」

「春の黄金　サンシュユと日本ミツバチ」　須藤和之 画

写真で楽しむ 美しい自然

『初雪とサザンカ―群馬県立敷島公園』（前橋市）

《撮影》藤重朋紀氏

略歴
1952　群馬県利根郡みなかみ町生まれ
1971　群馬県渋川高等学校卒業
1972　東京写真専門学校中退
1979　コマーシャルフォトスタジオ創美社
2001　フリー
2010　写真集「上州路·一本桜」
2011　写真集「上州路」

表紙の絵
「春の黄金サンシュユと日本ミツバチ」
《F6号》

須藤 和之 プロフィール

Kazuyuki Sutoh Profile

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業　2007年 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復日本画修了　2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得　博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展（画廊翠巒）（同2011～24）　2011年 中央電機商会カレンダー原画（2011～24）　2013年 アーツ前橋開館記念展出品、群馬銀行創立80周年記念収蔵作品制作　2014年 個展（日本橋三越本店）（同2017,20,23）
2017年 群馬県展 県知事賞　2016年 個展（株式会社ヤマト）
2019年 高崎市タワー美術館トップランナーIII出品　2020年 上毛芸術文化賞受賞　2022年 個展（株式会社ヤマト）
2023年 群馬銀行創立90周年記念 収蔵作品制作　現在 日本美術院院友 群馬県美術会会員 慶應義塾大学非常勤講師（2013～24）
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET　URL http://sutooo.net/

和's YAMATO わずやまと
2025年初春号（第63号）

《和's YAMATOの由来》ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和'sYAMATO初春号　2025年（令和7年）1月発行
発行：株式会社ヤマト広報室　群馬県前橋市古市町118　TEL.027-290-1891　FAX.027-290-1896

建設プロダクト ヤマト
【発行】株式会社ヤマト　〒371-0844 群馬県前橋市古市町118　TEL：027-290-1800（代）　FAX：027-290-1896
支　　店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ　https://www.yamato-se.co.jp/

江戸の出版界に旋風起こす「江戸のメディア王」

蔦屋重三郎（Tsutaya Juzaburo）の卓越した手腕

蔦屋重三郎は江戸時代の安永元年（1772）に、浅草・吉原で貸本屋を開業し、わずか10年ほどで江戸の出版界をリードする地位を固め、才能のある作家や絵師を発掘し、「江戸のメディア王」、「江戸文化のプロデューサー」と称されるようになる。世襲による既得権益の継承が主流の時代に、一代での劇的な躍進の背景には、田沼意次による経済活性化策と社会の自由化がある。重三郎はその時流に乗って出版メディアの新たな企画を連発し、江戸文化をけん引したのだった。

名所江戸百景 廓中東雲
国立国会図書館デジタルコレクション

始まりは吉原の貸本屋

蔦屋重三郎は寛延3年（1750）1月7日に、江戸の吉原で生まれた。本名は柯理（からまる）、重三郎は通称であった。当時の徳川将軍は九代家重で、前将軍吉宗が大御所として幕府に睨みを利かせていたが、翌年の宝暦元年（1751）には吉宗が亡くなり、時代は大きく変わろうとしていた。

重三郎の父は尾張から江戸に出た丸山重助という人物で、母は江戸生まれだった。重三郎が7歳の時に両親が離別したため、商家の蔦屋に養子入りすることになり、ここに蔦屋重三郎が誕生する。蔦屋は吉原で茶屋を営む商家で、安永元年（1772）、重三郎は23歳の時に義兄の蔦屋次郎兵衛からの助力を得て、吉原大門口の五十間道で書店耕書堂を開店した。「書物を耕す」という屋号には、出版界に刺激を与えて新機軸の書物を刊行したい、さらには出版界そのものを変えたいという重三郎の熱き志が込められていたかもしれない。

江戸時代は書物が高価なため、貸本業が盛んで、重三郎は武士や町人の区別無く得意先を開拓した。得意先に足しげく通うことで読者の好みをリサーチして、売り上げに結びつける。その行動は現代に当てはめればマーケティングであり、後に重三郎が出版業で成功する端緒だった。

安永2年より、鱗形屋孫兵衛（うろこがたやまごべえ）が出版する吉原細見（よしわらさいけん）の販売を開始する。この本は、吉原を訪れた遊客が知りたい情報（遊女屋や遊女の源氏名・位付け、芸者や茶屋の名前など）を詳細に記載したガイドブックで、春と秋の年2回刊行されていた。翌3年になると、孫兵衛から細見に掲載する最新データの収集を依頼される。重三郎は貸本屋として遊郭や茶屋などに足繁く出入りすることで各店の事情により詳しくなっており、その情報収集力に孫兵衛が目を付けたと考えられる。重三郎は貸本業を通じて得た情報ネットワークや独自のコネクションを活用し、出版業に進出する足がかりを得たのだった。

活発な出版活動で経営基盤を強化

重三郎が出版界にデビューした安永期（1772～81）は、リスクの小さい出版物を多く手がけた。吉原の関連では、夏の玉菊燈籠（引手茶屋の軒先に燈籠を飾る）、秋の俄（あきのにわか・仮装した芸者や幇間が寸劇や舞踊を演じる）といった吉原オリジナルのイベントに関するガイドブックが挙げられる。イベントを盛り上げて遊客を増やしたい吉原からの求めに応じた、売上げが見込める出版物だった。吉原細見と同じく吉原のPRにつながる出版物であり、重三郎は吉原からの依頼を受けた広告代理店のような役割を果たしていた。

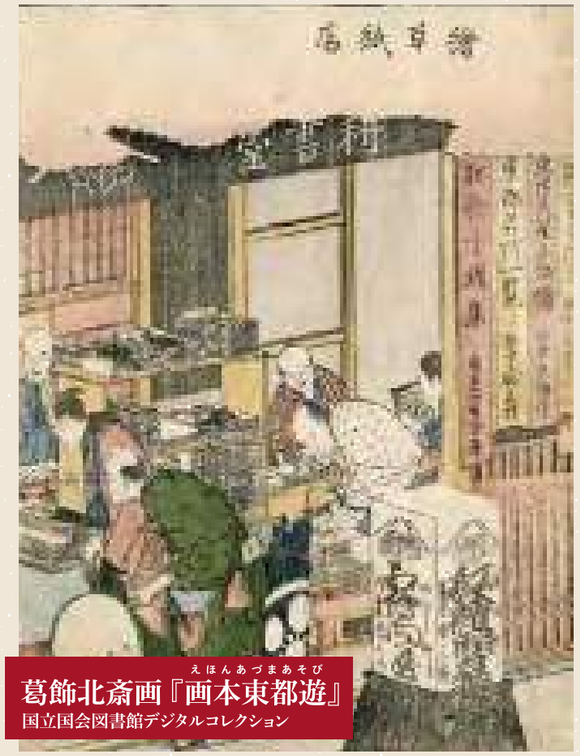
吉原関連本以外でも、安定的な売り上げが見込めるジャンルにも進出する。富本節（とみもとぶし）の正本・稽古本と往来物の出版の二つだ。現代風に言うと、音楽のテキストや初等教育用教科書の出版に乗り出した。

富本節は浄瑠璃（三味線伴奏による語り物）の流派の一つで、当時は人気が高かった。重三郎は富本節を修得したい者が増えると予想し、安永6年（1777）に富本節の作品に関する正本（音曲の詞章を記した本）や稽古本（稽古用として節付けがされている本）を出版した。この企画はヒットし、安定した売上げにつながった。

また、流行に乗るだけでなく、手堅い出版物も手がけた。それは江戸時代の教科書ともいえる「往来物」である。寺子屋に代表される庶民教育で使用された往来物は、薄利ではあったが版を重ねて長期間売れるメリットがあった。安永9年（1780）より重三郎は毎年のように往来物を出版し、経営の安定に寄与した。

浮き沈みの激しい江戸の出版界で、経営を軌道に乗せるために吉原細見のようなガイドブックから教育書まで扱い、確実に出版事業の幅を広げて、経営基盤を強化していった。

主要参考文献：「蔦屋重三郎と田沼時代の謎」安藤優一郎著
文：木下直也



葛飾北斎画『画本東都遊（えほんあづまあそび）』
国立国会図書館デジタルコレクション

葛飾北斎画『画本東都遊に、耕書堂が描かれている。1802（享和2）年の作品

『耕書堂の店舗』左側の建物
国立国会図書館デジタルコレクション

天明4年（1784）に刊行された大田南畝の『此奴和日本（こいつはにっぽん）』（『寿塩商婚礼（ことぶきしおあきないこんれい）』の改題再摺本）という小説の挿絵

江戸時代の出版事業

書物問屋と地本問屋

江戸の出版界の歩みを紐解くと、経済や文化面で江戸（関東）が上方（関西）に後れを取っていたことを背景に、江戸中期までは上方の出版業が江戸の出版業を完全にリードした。

江戸の人々は、京都や大坂など上方圏で製造された品を何であれ「下りもの」と称して重んじた。江戸では生活物資の大半を上方産の下りものに依存したのが実態であった。出版物も上方依存の傾向が強かった。江戸の書物問屋のほとんどが上方資本を背景に設立された店舗、もしくは上方の本屋の出店だったことはその象徴である。

江戸が百万都市となった江戸中期に入ると、巨大人口を背景とした需要の拡大が追い風となって江戸の出版業は急成長を遂げる。ついには、上方での出版点数を凌駕するまでになった。この急成長を牽引したのは、大衆向けの草双紙（絵入りの娯楽読み物）、浄瑠璃本、絵本、錦絵（浮世絵）などの一枚刷りの出版物の急増である。これらは江戸生まれの出版物すなわち地物という意味で、「地本」と呼ばれた。地本を取り扱った問屋は地本問屋（地本屋）と呼ばれ、書物問屋と同じく版元としての顔を持っていた。

江戸の出版界は活況を呈するが、幕府は四代将軍家綱の寛文年間（1661～73）に、出版統制を開始する。出版物が売上を上げるために政治批判を強め、将軍や幕府の権威が損なわれるのを懸念したのだ。将軍の話題はタブー視される社会環境を整えることに躍起になり、出版界はダメージを受けることになった。

吉原の変遷と繁栄

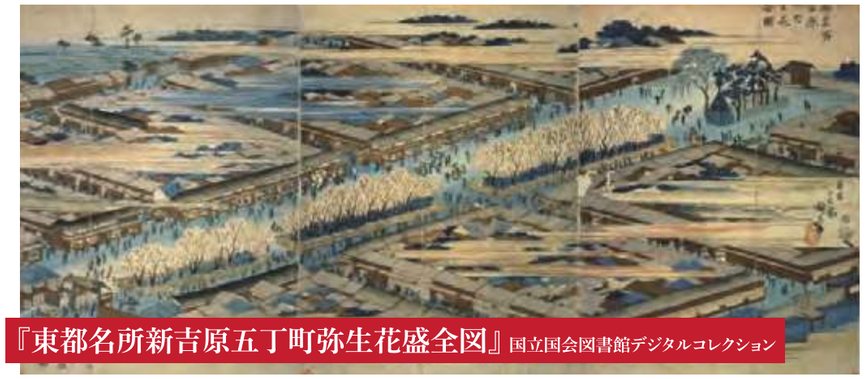
日本橋の東側にあった吉原遊郭

江戸開府の頃、江戸の遊女屋は市中に散在していた。しかし、庄司甚右衛門たち遊女屋の陳情を受ける形で、町奉行所は一区画にまとめることを決める。元和3年（1617）3月、甚右衛門は町奉行所に呼び出され、市中の遊女屋を集めて遊郭を建設することが許される。その用地として、日本橋の葺屋町（現東京都中央区日本橋芳町・堀留町）の東側に隣接した約二町四方の土地（現中央区人形町周辺）が与えられた。翌4年（1618）より甚右衛門たちは同所で営業を開始するが、これが吉原遊郭のはじまりである。

その後、江戸が泰平の世になるにつれ、人々が遊興を楽しむ機会が格段に増える。吉原もたいへん賑わうが、江戸の人口急増を受けて、開設当時は葦が茂れる湿地帯だった吉原周辺も宅地造成が進む。そこで、幕府は吉原に対して江戸郊外への移転を命じる。明暦2年（1656）のことであった。移転先は、隅田川東岸にあたる本所と浅草寺裏手の日本堤（現東京都台東区千束）と決まった。移転後の吉原の規模は東西が百八十間（約355メートル）、南北は百三十五間（約266メートル）であり、その面積は2万坪余にも達した。移転前の吉原は元吉原、移転後の吉原は新吉原と呼ばれた（通例では、新吉原を吉原と呼称する）。遊女の逃亡を防ぐため、廓への出入りは大門の一ヵ所で、周囲は黒板塀が廻らされ、その外側には堀が設けられた。

一日に金千両もの大金が落ちた場所が、江戸には三つあったといわれる。朝に日本橋の魚市場で、昼に日本橋など（後に浅草）の芝居町、夜に遊廓吉原で千両ずつ落ちたという喩えだが、吉原の場合、遊女屋だけで千両落ちたのではない。茶屋などの飲食店で落ちた分を含めた金額だった。蔦屋もそんな吉原の賑わいの一翼を担ったのだ。

（「蔦屋重三郎と田沼時代の謎」より構成）



『東都名所新吉原五丁町弥生花盛全図』国立国会図書館デジタルコレクション

蔦屋重三郎関係年表

寛延3年（1750）	1才	1月7日：吉原で生まれる。父は丸山重助と母は広瀬津与
宝暦10年（1760）	11才	5月：徳川家治が10代将軍となる
		前将軍家重の御側御用取次田沼意次、引き続き家治の御側御用取次を勤める
明和4年（1767）	18才	7月：意次、側用人に昇進
明和6年（1769）	20才	8月：意次、老中格に昇進
明和9年・安永元年（1772）	23才	1月：意次、老中に昇格。この年、吉原大門口の五十間道で書店耕書堂を開店。
安永2年（1773）	24才	この年、吉原細見の販売を開始
安永3年（1774）	25才	7月：遊女評判記『一目千本』（最初の出版物）を刊行
安永4年（1775）	26才	7月：吉原細見の出版を開始
安永6年（1777）	28才	この年、富本節正本・稽古本を出版できる株を取得
安永9年（1780）	31才	この年より、黄表紙、洒落本、往来物の出版を開始
天明元年（1781）	32才	閏5月：一橋治済長男豊千代（後の家斉）、将軍継嗣となる
		12月15日：意次嫡男田沼意知、奏者番に抜擢
天明3年（1783）	34才	7月：浅間山の大噴火
		9月20日：西上野で上信騒動勃発
		9月：通油町の地本問屋丸屋小兵衛店舗と蔵を買い取り、移転。地本問屋の株も入手
		11月1日：意知、若年寄に昇進。この年より狂歌本の出版を開始（後に狂歌絵本も出版）
天明4年（1784）	35才	3月24日：意知、江戸城中で新番佐野善左衛門に斬られる（26日に死去）
天明6年（1786）	37才	6月29日：全国御用金令発令
		8月24日：御用金令、印旛沼干拓工事中止　25日：将軍家治死去　27日：意次、老中辞職
		9月6日：御三家、家治の遺言により幕政に参与（9/7、一橋治済も幕政に参与）
		閏10月5日：意次、2万石減封と謹慎を命じられる
		12月15日：御三家が幕閣に対し、松平定信を老中に推挙（翌年2/28、幕閣は定信の起用を拒否）
天明7年（1787）	38才	4月15日：家斉が将軍職就任
		5月20日：江戸で大規模な米騒動勃発　29日：定信起用に反対する御側御用取次横田準松罷免
		6月19日：定信、老中首座に就任
		10月2日：意次、二万七千石没収、隠居、蟄居謹慎を命じられる
天明8年（1788）	39才	1月：朋誠堂喜三二『文武二道万石通』出版
		7月24日：意次死去（享年七十）
寛政元年（1789）	40才	1月：恋川春町『鸚鵡返文武二道』出版
		7月：春町死去
寛政2年（1790）	41才	5月：町奉行所が書物問屋仲間に出版取締令を布告
		10月：町奉行所が地本問屋仲間に行事を置くことを命じる
寛政3年（1791）	42才	3月：書物問屋仲間に加入。出版取締令違反により山東京伝の洒落本『仕懸文庫』など三冊が絶版。京伝は手鎖五十日、重三郎と行事二人は身上に応じた重過料の判決が町奉行所で下る
寛政4年（1792）	43才	5月：林子平の『三国通覧図説』、『海国兵談』が絶版、子平は仙台での蟄居
		版元の須原屋市兵衛は過料30貫文、行事は過料10貫文の判決が町奉行所で下る
寛政5年（1793）	44才	7月23日：定信、老中退任　8月、美人画でモデルの名前を書き入れることが禁止
寛政6年（1794）	45才	5月：東洲斎写楽の役者絵を大量に出版（～翌年1月）
寛政7年（1795）	46才	3月25日：伊勢松坂に赴き国学者本居宣長と対面
寛政8年（1796）	47才	8月14日：美人画で判じ絵を書き入れることが禁止。秋、脚気が重くなり病の床に就く
寛政9年（1797）	48才	5月6日：重三郎病没。山谷の菩提寺正法寺に葬られる

社会の自由度が高かった「田沼時代」

将軍の厚い信任を得ていた田沼意次

Tanuma Okitsugu

遠江国相良の大名となる

田沼意次（たぬまおきつぐ）は享保4年（1719）、旗本・田沼意行の長男として江戸で生まれた。意行は紀州藩主徳川吉宗に仕えていたが、紀州藩は徳川家御三家の一つで、吉宗が八代将軍の座に就いたことにより、意行も幕臣に編入された。

意次は、享保19年（1734）に次期将軍・家重に仕えていたが、家重は延享2年（1745）9月に九代将軍となった。意次は家重からの信任が厚く、延享4年から将軍側近の筆頭格である御側御用取次に抜擢された。御側御用取次は、老中からの上申を将軍に取り次ぐ際に自分の意見を直接述べることがあった。この件は上申できないと取り次ぎを拒絶する場合さえあり、その実態は側用人と変わりはなかった。御側御用取次に任命されたことで、意次は幕政に影響力を発揮しはじめる。意次が40歳の宝暦8年（1758）9月には五千石を加増され、遠江国相良一万石の大名となる。

宝暦10年（1760）5月、家重は大病のため将軍の座を嫡男家治に譲った。これに伴い、家重の側近団は本丸御殿を去ったが、意次は本丸にとどまり、18歳年下の新将軍家治の御側御用取次を勤める。将軍が交代すると、将軍の側近団は入れ替わるのが通例であるので、意次の残留は異例のことだった。家治は意次の政治力を頼りにし、高く評価した。

その厚い信任のもと幕政に強い影響力を及ぼした。

6年（1769）8月には老中格に昇進する。注目すべきは側用人ではないのにも拘わらず、その職務を続けるよう命じられたことである。9年（1772）1月には老中に引き上げられるが、側用人の職務も継続した。通例では、権限を分散するため、老中と側用人はそれぞれ別人が務めた。老中でありながら、将軍の側近としての要職を兼任したのであり、これこそが意次の権勢が強力になった一番の理由となる。田沼時代が到来した背景でもあった。

田沼意次（牧之原市史料館所蔵）

時代の先端を行く財政政策

幕政のトップに立った意次にとり、最大の課題は幕府の財政難を克服することであった。鎌倉・室町幕府に比べると、当初江戸幕府の財政は豊かだったものの、四代将軍家綱の時代に明暦の大火（明暦3年・1657）が発生し、江戸城と城下が灰燼に帰し、復興に莫大な出費を余儀なくされ、江戸城本丸天守の再建を断念するほど幕府の財政は悪化した。加えて幕府領の年貢量が上限に近づき、年貢率のアップにも限界があり、歳入は増えなかった。

一方で、消費経済の発展で歳出は増大し、泰平の世になり経済は未曽有の発展を遂げるが、それは出費の増大も意味し、幕府にとっても例外ではなかった。消費経済の発展が歳出の増大を後押ししたが、その傾向に拍車をかけた人物こそ五代将軍綱吉である。華やかな元禄時代を象徴するかのように、綱吉は豪勢な生活を送ったが、それだけ歳出は増大した。綱吉の時代を境に、幕府は深刻な財政難に陥る。

その財政難を克服するため、八代将軍吉宗は享保の改革と呼ばれる幕政改革で財政再建を断行した。年貢量が増える一方で支出を抑えたため、収支は黒字に転換し、財政再建は成ったかにみえた。しかし、重税にあえぐ農民から激しい抵抗を受けたことで、これ以上年貢米を増やせない状況となり、収入増加の目途は立たなくなった。

こうして、年貢米に依存する財政構造の限界を悟った幕府はそれ以外の財源に注目するようになる。そこで登場するのが運上・冥加金だった。

享保改革の時より、幕府は商工業者による同業者の組合つまり株仲間の結成を認めるようになる。株を所有していない者はその商売や職業に関われず、株仲間に所属する商人や職人が利益を独占できる仕組みを構築した。

ただし、幕府から営業上の独占権が認められる代わりに、株仲間は冥加金の上納が義務付けられた。冥加金とは営業上の特権を与えられたことへのお礼として差し出した献金のことだが、事実上の営業税でもあったため、運上とも呼ばれた。幕府は運上・冥加金の賦課対象を拡大し、歳入の増加を図った。田沼時代は商人の力を活用することで従来にない施策が取られた時代だった。

脇が甘かった意次

田沼時代の政策については、幕府当局と商業資本の癒着が指摘されるのが定番である。新規事業の献策に際し、そこに利権を見出した商人が勘定所など関係部署の役人に賄賂を贈るのは日常茶飯事となっていたが、別に田沼時代から始まったことではない。

民間からの献策を政策として取り入れることは、五代綱吉の時代から盛んにみられる。しかし、民間の献策を取り入れることで江戸の社会が活性化したのは間違いないが、関係部署への働きかけの過程で賄賂が横行したのもまた事実である。許認可権を持つ部署への裏工作が激しかったのは江戸時代も例外ではなかった。

田沼時代に入ると、民間からの献策を積極的に受け入れるスタンスが顕著になり、賄賂もさらに横行したが、そうした口利きを最も依頼された人物こそ、老中田沼意次の家臣だった。幕府のトップとして、賄賂を横行させた意次の脇の甘さは非難されても仕方がないが、一代で大名にまで登りつめたこともあり、厳格な身分制の縛りとは無縁な大名家で、家臣団を統制しきれていなかった。戦国時代は終わり、当時は泰平の世を背景に序列は固定していたにもかかわらず、意次は将軍の信任の厚さを後ろ盾に幕府のトップへと成り上がったことで、幕臣社会からの嫉妬や反感は避けられなかった。三河譜代に代表される先祖代々の幕臣たちからみれば、意次は父の代に幕臣に取り立てられた新参者に過ぎなかった。成り上がり者として白眼視されたことは想像するにたやすい。

意次もその点はよくわかっていたはずだが、家臣団を充分にコントロールできないまま、補佐役の家老や用人が商人たちに付け込まれてしまう。脇の甘さを露呈し、賄賂政治家として伝承されることになった。

だが、意次の脇の甘さに象徴されるように、当時の社会は後の寛政改革とは違って規制も緩く、自由な雰囲気に包まれていた。こうして、経済も社会も活性化されたが、そんな時流に乗って出版人としての能力を存分に発揮したのが、意次と同じ成り上がり者の重三郎だったのである。

「蔦屋重三郎と田沼時代の謎」より構成

2025年 NHK大河ドラマ べらぼう
蔦重栄華乃夢噺（つたじゅうえいがのゆめばなし）

全体相関図と主な登場人物
（枠内下段は演者）

吉原

- 老舗妓楼の女将 いね（水野美紀）
- 最高級の遊女・呼出 松の井（久保田紗友）
- 盲目の大富豪 鳥山検校（とりやまけんぎょう）（市原隼人）
- 瀬川を身請け
- 吉原の女郎屋 大黒屋女将 りつ（安達祐実）
- 蔦重の幼なじみで伝説の女郎 花の井（はなのい）（五代目瀬川（こだいめせがわ））（小芝風花）
- 蔦重を慕う

蔦屋

- 駿河屋の女将 ふじ（飯島直子）
- 吉原を代表する引手茶屋の主 蔦重の養親 駿河屋（するがや）（高橋克実）
- 蔦屋重三郎の妻 てい（橋本 愛）
- 江戸のメディア王 蔦屋重三郎（つたやじゅうざぶろう）（蔦重（つたじゅう））（横浜流星）

書店版元

- 江戸を代表する地本問屋 鱗形屋孫兵衛（うろこがたやまごべえ）（片岡 愛之助）
- 「鱗形屋」の跡取り 鱗形屋長兵衛（うろこがたやちょうべえ）（三浦獠太）
- 京ゆかりの地本問屋 鶴屋喜右衛門（つるやきえもん）（風間俊介）
- 書物問屋の店主 須原屋市兵衛（すはらやいちべえ）（里見浩太朗）
- 「錦絵」の永寿堂 西村屋与八（にしむらやよはち）（西村まさ彦）

絵師

- 天才絵師 喜多川歌麿（きたがわうたまろ）（染谷将太）
- 葛飾北斎の師匠 勝川春章（かつかわしゅんしょう）（前野朋哉）
- 雛形若菜初模様の絵師 礒田湖龍斎（いそだこりゅうさい）（鉄拳）

幕府

- 11代将軍・家斉の“父” 一橋治済（ひとつばしはるさだ）（生田斗真）
- 10代将軍 徳川家治（とくがわいえはる）（眞島秀和）
- 幻の11代将軍の母 知保（ちほ）の方（高梨 臨）
- 幻の11代将軍 徳川家基（とくがわいえもと）（奥 智哉）
- 意次との深い絆
- 松平定信を育てた“母” 宝蓮院（ほうれんいん）（花總まり）
- のちの松平定信 田安賢丸（たやすまさまる）（寺田 心）
- 大奥総取締 高岳（たかおか）（冨永 愛）
- 幕政の改革者 田沼意次（たぬまおきつぐ）（渡辺 謙）
- 上野国館林藩主 老中首座 松平武元（まつだいらたけちか）（石坂浩二）
- 田沼意次の嫡男 田沼意知（たぬまおきとも）（宮沢氷魚）
- 田沼意次の側近 三浦庄司（みうらしょうじ）（原田泰造）
- 小説「鬼平犯科帳」主人公 長谷川平蔵（はせがわへいぞう）（中村隼人）
- 御三卿・清水徳川家当主 清水重好（しみずしげよし）（落合モトキ）

文人学者

- 戯作者・発明家 平賀源内（ひらがげんない）（安田 顕）
- 行動を共に
- 浪人 新之助（しんのすけ）（井之脇 海）

出版事業を拡大 / 商業を重視

- 業界最大の“敵”
- 蔦重と浮世絵の美人画を仕掛ける
- 蔦重の永遠のライバル

凡例

- 協力・友好関係
- ライバル対立関係
- 血縁・師承関係
- 婚姻関係

郷土 史跡めぐり〈群馬県北群馬郡榛東村新井〉

高塚古墳

武人埴輪が出土した古墳

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　主任調査研究員　宮下 寛

❶ 高塚古墳 石室前（南から撮影）

古墳の位置
（国土地理院2万5千分の1地形図「金井」使用）

❷ 高塚古墳全景

古墳の立地

今回紹介する古墳は、榛東村に所在する高塚古墳です。榛東村は、群馬県の中央部、榛名山東麓に位置します。遺跡が多い地域でもあり、国史跡に指定されている縄文時代後期から晩期の茅野遺跡をはじめ、多くの遺跡や古墳が分布しています。

高塚古墳は、標高約170mの丘陵の自然地形を生かして築造された前方後円墳です。群馬県内でも北方に位置する前方後円墳となります。群馬県林業試験場の敷地内にあり、本館から遊歩道などを歩いて5分ほどの所にあります。高塚古墳は、昭和34年に群馬県指定史跡となりました。

古墳の規模と主な特徴

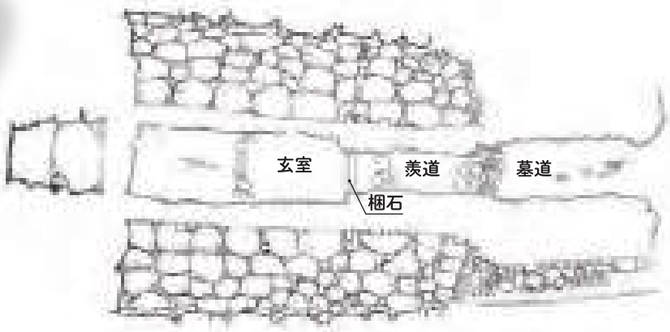
高塚古墳の発掘調査は、昭和34年に群馬大学の尾崎喜左雄教授の研究室によって実施されました。この調査によって、墳丘長は東西方向を主軸として約60m、葺石が施された2段築成の前方後円墳であることがわかりました。後円部の高さは、現状で約4.5m、前方部はこれより約0.5m低くなります。6世紀中頃の榛名山の火山爆発で噴出した軽石である榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）が墳丘に降り積もっていたことから、6世紀前半から中頃の築造と考えられています。

古墳の周辺はスギやコナラなどの樹木の林地となっていますが、墳丘の周囲を散策しながら歩くことで、古墳の規模などを実際に体感できます。

巨石を使用した石室

埋葬施設となる石室は後円部にあり、南に向かって開いています。遺体を置く玄室が左右に拡がる両袖型の横穴式石室で、巨石を利用した大型石室です。石室の全長は約10m、玄室の奥壁は巨石2石を積んでおり高さは約2.8mにおよびます。玄室や羨道の天井も、巨石4石を用いた構造です。

❸ 石室内部の様子



石室の平・側面図（群馬県史資料編3より）

玄室に向かう羨道部では入口に段差があり、框石を設けて一段下りる構造になっています。入口から約3m奥の位置には天井石のやや下に楣石を渡しています。さらに玄室入口には梱石を置き、玄室中央部に間仕切りの石が並べられて内部を区画しています。残念ながら、現在は石室入口に柵を設けているため内部に立ち入ることはできませんが、石室入口から内部を観察することはできます。

古墳から出土した数多くの遺物

高塚古墳は盗掘されていましたが、石室内から、鉄鏃、刀子、金銅製の耳鐶が、羨道入口の前庭から、須恵器台付壺が出土しました。

墳丘からは、円筒埴輪と形象埴輪が出土しています。円筒埴輪は後円部東南の基壇面の縁辺などに配列され、朝顔形埴輪も含まれていました。形象埴輪では、墳丘南側のくびれ部付近の基壇から出した武人埴輪が目を引きます。この埴輪は、小さな鉄板を紐で綴じ合わせた小札甲ともよばれる挂甲を身にまとっています。頬当て、後ろに綴が取り付けられた衝角付冑をかぶり、大刀の把に手をかけてまさに抜刀するようなスタイルの整美なものです。この武人埴輪の近くからは、ほとんど出土例の無い弓形埴輪（高さ109cm）が出土しました。さらに、盛装女子、甘を載せた器台、玉纏大刀、盾、靫、靫、家形などの埴輪が出土しており、噴頂や基壇に配列していたと考えられています。

古墳までのアクセス

おもな交通手段は、前橋駅から前橋榛東線バスを利用し、柿の木坂で下車徒歩約3分。関越自動車道駒寄インターから車で約10分。群馬県林業試験場内に駐車場やトイレがあり、見学の場合は本館事務室で受付が必要です。開庁している平日のみ見学が可能です。石室が見られる高塚古墳をぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

参考資料
・「群馬県史資料編3」1986群馬県
・「東国文化副読本」2023群馬県、群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会
・「ぐんま古墳探訪」2017群馬県教育委員会事務局文化財保護課
・「群馬県立歴史博物館第99回企画展集まれ！ぐんまのはにわたち」2018群馬県立歴史博物館

遺物写真
群馬大学共同教育学部所有
群馬県立歴史博物館提供

シリーズ 群馬の芸術家 27

陶芸と絵画で綴る比翼連理の人生

平尾峰春（陶芸）・泰子（洋画）

美術研究家 染谷 滋

夫婦で芸術文化功労賞を受賞

企業メセナ群馬の令和5年度の芸術文化功労賞には、陶芸家の平尾峰春と洋画家の平尾泰子が選ばれた。長年にわたり夫婦相携えて芸術の道を歩み、それぞれに豊かな成果を残していることが評価されたものだが、夫婦での受賞は初めてのことだ。

群馬県内でも、パートナーが共に芸術家であるケースは増えてきているように思われる。同じジャンルの制作者である場合もあるが、平尾夫妻のように異なるジャンルのケースも多い。私自身はアーティストではないので想像するしかないが、芸術家同士で理解し合える度合いは、片方がそうでない場合と比べればはるかに大きいような気がする。

群馬の陶芸を先導

平尾峰春は一九四〇（昭和一五）年八月、滋賀県信楽町に生まれた。本名は喜三。信楽の地は良質な陶土が取れ、鎌倉時代より焼き物作りが盛んで、日本六古窯のひとつに数えられている。父親の平尾長楽（本名は長七）が信楽焼の陶芸家で、群馬の好事家たちに請われて前橋に移住してきたのは戦時中の一九四三年である。鉄分の多い赤城山の土で、新しい作品づくりに挑戦するためと言われているが、戦時中の鉄材不足から陶器製兵器の製造が信楽で行なわれるようになり、それを嫌って前橋に移住したとも考えられる。まだ幼かった平尾峰春の記憶には、信楽に比べて前橋は温かいという印象が残っている。父・長楽に師事して作陶を始めたのは戦後の一九六三年である。

「土もみ三年、ロクロは十年」といわれるように、陶芸の道は容易ではない。平尾峰春がひとつの峰の頂にたどり着いたのは、一九八二年の全国規模の陶光会での最高賞・陶光会賞を受賞した頃だろう。翌年には、上毛芸術奨励賞も受賞している。

作風は線文、練り上げ、彩土、焼締めと多岐にわたり、ひとつの技法を究めたかと思うと新たな技法へと挑戦を繰り返した。「飽きっぽいんですかね」と笑って語ったが、どの技法も細かな作業を長時間繰り返すものが多く、根気がなければとても続かないものだ。

ここでは技法の説明を詳しくする余地はないが、焼締めというのは信楽の伝統的技法で、土と火による素朴で自然な焼き物の原点である。これを可能としたのは、一九九三（平成五）年に赤城山麓の中之沢に築いた穴窯「赤城大松窯」であった。二〇年近く働いたこの穴窯は、二〇一一年の東日本大震災で崩れ、残念ながら今はない。

一九九九年の第五〇回記念県展で、山種記念特別賞に選ばれたのは練り上げの鉢だった。美しい色彩と均整の取れた形は、現在の時点で振り返っても、練り上げを平尾峰春の代表的技法として良いように思う。

「SCENE・07・I」 平尾泰子

「練上深鉢」 平尾峰春

二科会を舞台に活躍

平尾泰子は一九四三（昭和一八）年九月、前橋市に生まれた。旧姓は坂田。二十代の頃から油絵を始め、二科展を見て自分もこのような場所で作品を発表してみたくなり、前橋の二科会の重鎮である清水刀根を訪ねた。一九六九年のことだ。持参した五〇号の作品を秋の二科展に初出品することになり、いきなり初入選となった。県展への出品もこの年からで、おそらくは清水の勧めがあったのだろう。

当時、前橋での二科会の存在は大きく、戦前から市内のアトリエで後進を育てた清水刀根をはじめとして、久保繁造、狩野守、千本木康亘など群馬県美術会の会長に名を連ねる作家が活躍していた。その二科展に出品を続け、一九八五年には日本美術協会賞を受賞し、一九九三年に会友推挙となった。

ぐんま女流美術協会へも早くから出品しており、一九九七（平成九）年からは副代表、二〇〇二年には代表となって三年務めた。

画風は静物画が中心で、俯瞰的に配置されたテーブルの上のモチーフの数々がリズミカルに並び、色面分割された心地よい背景の中で、室内楽でも聞いているような穏やかな気持ちにさせてくれる。「日々」と題されたシリーズでは、背景に木々が取り入れられ、風景画と一体となった静物が、平穏な日常を静かに賛美しているようだ。

利根川と敷島公園の自然の中で

平尾泰子がまだ坂田泰子の名で二科展や県展にデビューした一九六九（昭和四四）年秋、上毛新聞に平尾長楽・峰春親子の記事が掲載された。九月一四日の紙面で、「陶器作り一筋、前橋の平尾さん親子」「群馬の土に魅せられて」などの見出しが並び、制作に励む親子の写真が大きく載っている。二七日にはNHKテレビ「町から村から」で紹介されると記事にはある。

当時平尾親子の登り窯「松風窯」は、今では考えられないかもしれないが、敷島公園の松林の中にあった。一九五三年に築いたもので、公園が整備されるに従い立ち退きを命じられたのはこの記事の数年後のこと。一九七三年三月二二日の上毛新聞には「松風焼、保存正式に決まる」の見出しで移転先が決まったことを伝えている。松風焼の愛好者たちが署名運動に立ち上がった結果で、五〇〇メートル西へ離れた現在の敷島町へ移ることになる。

平尾峰春と泰子が結婚したのも、この移転騒ぎの最中だった。新しい作業場で新居となった場所は、利根川と敷島公園に挟まれた住宅地の中にある。以来、五〇年を超える年月が二人の間に流れた。

長楽、峰春と続いた松風窯は、三代目の平尾卓哉に受け継がれている。一九七五年に平尾夫妻の間に生まれた子だ。夫妻の作品共々見守り続けたい。

略歴 平尾峰春 MINEHARU HIRAO

- 1940 8月、滋賀県甲賀郡信楽町に生まれる
- 1943 前橋に転居
- 1964 父・長楽に師事し陶芸を始める
- 1966 第17回群馬県展に出品、以後毎年（現在参与）
- 1978 全陶展に出品、以後毎年（現在名誉会員）
- 1983 上毛芸術奨励賞
- 群馬工芸美術会発足に参加
- 1995 前橋文学館「現代前橋美術作家展」に出品
- 1999 第50回群馬県展で山崎記念特別賞
- 2008 前橋市社会教育活動功労者表彰（2015年にも）
- 2009 群馬県立近代美術館「群馬の美術」に出品
- 2014 上毛新聞社「夢の軌跡」に出品
- 2017 アーツ前橋「アートの秘密」に出品
- 2022 前橋市市制130周年記念表彰
- 2024 企業メセナ群馬芸術文化功労賞

略歴 平尾泰子 YASUKO HIRAO

- 1943 9月、前橋市に生まれる
- 1969 第54回二科展に初入選、以後毎年
- 第20回群馬県展に出品、以後毎年
- 第33回群馬県展で準会員推挙
- 1982 第70回二科展で日本美術協会賞
- 1985 第38回群馬県展で会員推挙（現在理事）
- 1987 アートミュージアム赤城で個展（以後度々）
- 1991 第43回群馬県展で会員賞
- 1992 第78回二科展で会友推挙
- 1993 群馬県民会館「木と絵の二人展」
- 1994 第80回二科展で会友賞
- 1995 春季二科展に選抜出品
- 1996 ぐんま女流美術協会代表（2004年まで）
- 2002 二科会選抜ニューヨーク・ハワイ巡回展
- 2004 企業メセナ群馬芸術文化功労賞
- 2024

市民生活を支える水道施設

前橋市敷島浄水場 配水池

前橋市敷島浄水場 配水池2基が完成

配水池と配水塔（後方）　配水塔は令和3年4月に新設されました

配水地、配水塔と旧配水塔（奥）　旧配水塔は昭和4年（1929）に完成しました

前橋市敷島浄水場の配水池2基の工事が完成しました。形状は丸型で、強度の地震が発生した場合でも損傷しにくい構造となっています。ステンレス製で直径35・7mの配水池は全国的に2番目となる大きさとのことで、屋根・天井などは特殊な構造となっています。また、材質はサビに強いステンレスが採用されており、今後100年以上使用できる計画です。建設プロダクトのヤマトは、新配水池の築造工事に携わりました。

工事概要

工事件名：敷島浄水場配水池築造工事
（施更第1号）
所在地：前橋市敷島町216番他
工　期：令和4年8月24日～令和6年10月31日
発注者：前橋市公営企業管理者
受注者：ヤマト・泉野・前橋地建特定建設工事共同企業体
材　質：ステンレス鋼
基礎の材質：直接基礎（鉄筋コンクリート）
池の直径：35・7m　池の高さ：10・75m
全体容量：5,000㎥／池×2＝10,000㎥
（全体で25mプール約20杯分）

横から見た配水池

配水池の内部　大空間が広がります

マンホールの蓋には、配水池やイメージキャラクターのタンクくんのイラスト等が描かれています。

1号配水池流出弁室のマンホールの蓋

1号配水池流入弁室のマンホールの蓋

2号配水池流入弁室のマンホールの蓋

配水池の役割

配水池は、きれいな水をいつでも給水できるように貯めておく池です。家庭では、朝から10時位までと、夕方から9時位までがたくさん水を使います。その他、突然多くの水を必要とすることもあります。その様な時にも、充分使えるように配水池に貯めておきます。

配水池は、きれいな水を貯めて置く所ですから蓋があり、ごみなどが入らないようになっています。さらに、日光が入ると藻などが繁殖して水が汚れます。しかし、水から塩素ガスやその他のガスがでることもあるので、通気筒があります。

敷島浄水場の配水池は、敷島浄水場から送っている水の約半日分が配水池に貯めてあります。

（前橋市ホームページ 前橋市の上水の歴史より）